

# 正誤表

『2023年度 都道府県 登録販売者試験 過去問題集』及び『解答・解説』に、以下の誤りがありましたので、訂正してお詫び致します。

一般社団法人 日本薬業研修センター

## 『過去問題集』

【該当箇所】	【誤】	【正】
6 頁〔18〕の選択肢ウ	製造販売後の調及び試験の実施の基準	製造販売後の調査及び試験の実施の基準
54 頁〔28〕の選択肢エ	プリオン	プリオン
81 頁〔83〕の問題文	交感神経系が副交感神経より～	交感神経系が副交感神経より～
81 頁〔83〕の選択肢ア	瞳孔収縮	瞳孔収縮
81 頁〔83〕の選択肢エ	抹果筋の発縮	排尿筋の弛緩
87 頁〔16〕	c 腎機能に～なったりする。d 小腸など～代謝活性がない。	c 腎機能に～なったりする。 d 小腸など～代謝活性がない。
111 頁〔11〕の選択肢b	旅の切れを良くする。	痰の切れを良くする。
111 頁〔11〕の選択肢c	発熱をめぐる。	発熱を鎮める。
192 頁〔28〕の選択肢エ	～余分な皮膚を取り除く作用を～	～余分な皮脂を取り除く作用を～
239 頁〔51〕	a 食品衛生法～飲食物をいう。b 健康食品～呼ばれることもある。	a 食品衛生法～飲食物をいう。 b 健康食品～呼ばれることもある。
240 頁〔56〕の選択肢5	昔の健康維持に役立つ。	骨の健康維持に役立つ。
306 頁〔3〕の選択肢a	～約 3000 3 の医療機関～	～約 3000 の医療機関～

## 『解答・解説』

【該当箇所】	【誤】	【正】
18 頁〔2〕の選択肢 a	～鎮痛作用を目的として胃腸薬にも配合された。	～鎮静作用を目的として胃腸薬にも配合された。
38 頁〔4〕の選択肢 b	～発症機序の詳細は不明であり、発症の予測は困難である。皮膚粘膜眼症候群～	～発症機序の詳細は不明であり、 <u>発症の可能性がある医薬品の種類も多い</u> ため、発症の予測は困難である。皮膚粘膜眼症候群～
46 頁〔10〕の選択肢 5	～安息香酸ナトリウムカフェイン等が、抗ヒスタミン成分や鎮静成分の作用による眠気を解消する目的で配合されている場合もあるが、 <u>カフェイン類</u> ～	～安息香酸ナトリウムカフェイン等が、 <u>解熱鎮痛成分（生薬成分の場合を除く。）の鎮痛作用を補助する目的で配合されている場合があるが、カフェイン類</u> ～
56 頁〔14〕の選択肢 a	<u>セネガはヒメハギ科のイトヒメハギの～用いられる。（キキョウはキキョウ科のキキョウの根を基原とする生薬で、痰又は痰を伴う咳に用いられる。）</u>	<u>オンジはヒメハギ科のイトヒメハギの～用いられる。（キョウニン、バラ科のホンアンズ、アンズ等の種子を基原とする生薬で、体内で分解されて生じた代謝物の一部が延髄の呼吸中枢、咳嗽中枢を鎮静させる作用を示すとされる。）</u>
84 頁〔16〕の選択肢 b	<u>ウフェナマートは、適用部位でプロスタグランジンの産生を抑えることで、湿疹、皮膚炎、かぶれ、あせも等の皮膚症状の緩和を目的として使用される。（ジフェンヒドラミンは、患部局所におけるヒスタミンの働きを抑えることで、湿疹、皮膚炎、かぶれ、あせも、虫さされ等による一時的かつ部分的な皮膚症状（ほてり・腫れ・痒み等）の緩和を目的として使用される。）</u>	<u>ウフェナマートは、細胞膜の安定化、活性酸素の生成抑制などの作用により、抗炎症作用を示すことで湿疹、皮膚炎、かぶれ、あせも等の皮膚症状の緩和を目的として使用される。（ジフェンヒドラミンは、患部局所におけるヒスタミンの働きを抑えることで、湿疹、皮膚炎、かぶれ、あせも、虫さされ等による一時的かつ部分的な皮膚症状（ほてり・腫れ・痒み等）の緩和を目的として使用される。）</u>
85 頁〔20〕の選択肢エ	<u>シクロピロクスオラミンは、皮膚糸状菌の～</u>	<u>イミダゾール系抗真菌成分（ビホナゾールなど）は、皮膚糸状菌の～</u>
91 頁〔1〕の選択肢 4	～薬用酒は、アルコール含有量を含有するため～	～薬用酒は、アルコール含有量を含有するため～
94 頁〔6〕の選択肢エ	<u>「漢方薬や生薬製剤」は、すべからく作用が穏やかで、副作用が少ないなどという誤った認識がしばしば見られることがある。しかし、センソのように少量で強い作用を示す生薬もあり、医薬品の販売等に従事する専門家においては、購入者等が、「生薬製剤は副作用が少ない」などといった誤った考えで使用するのを避け、適切な医薬品を選択することができるよう、積極的な情報提供を行うことに努める必要がある。（漢方医学の考え方に基づかない、生薬を使用した日本の伝統薬も存在し、漢方処方製剤と合わせて、生薬製剤と呼ばれる。）</u>	<u>「漢方薬はすべからく作用が穏やかで、副作用が少ない」などという誤った認識がなされていることがあり、副作用を看過する要因となりやすい。しかし、漢方処方製剤においても、間質性肺炎や肝機能障害のような重篤な副作用が起きることがあり、また、証に適さない漢方処方製剤が使用されたために、症状の悪化や副作用を引き起こす場合もある。医薬品の販売等に従事する専門家においては、購入者等が、「漢方薬は副作用が少ない」などといった誤った考えで使用するのを避け、適切な医薬品を選択することができるよう、積極的な情報提供を行うことに努める必要がある。</u>
105 頁〔14〕の選択肢 c	～劇薬又は毒薬で一般用医薬品に該当する。（要指導薬で劇薬例）	～劇薬又は毒薬で一般用医薬品に該当する <u>ものはない</u> 。（要指導薬で劇薬例）
109 頁〔45〕の選択肢エ		<u>化粧品の直接の容器又は直接の被包には、「化粧品」の文字の表示が義務付けられていない。</u>
118 頁〔45〕の選択肢 a、b	a 面鏡番号や登録番号は必要ない。 b 使用期限は必要ない。	a 免許番号や登録番号は必要ない。 b 名称及び使用期限は必要ない。
132 頁〔59〕の選択肢 d	d マオウー高血圧、心臓病、糖尿病	d マオウー高血圧、心臓病、糖尿病、 <u>甲状腺機能亢進症</u>
142 頁〔6〕の選択肢 b	<u>医療手当は、医薬品の副作用による疾病の治療（入院治療を必要とする程度）に要した費用を補償するもの（定額）である。</u>	<u>医療費は、医薬品の副作用による疾病の治療（入院治療を必要とする程度）に要した費用を実費補償するものである。</u>

(2024年8月20日)